

デロス同盟成立時に於ける貢税額について

鈴木雅也

序

第一回アテナイ海上同盟（デロス同盟）がその加入国より合計四六〇タラントンの貢税を徴集したことはツキジデスの銘記するところである。しかしながらツキジデスはこの事実をのべながら同盟加入国は義務として同盟艦隊建設のために艦船（乗組員を含む）もしくは艦隊建造のための貢税のどちらかを支払うべきであることをのべている。^①従ってここに云う四六〇タラントンは現金支払いのみを義務とした国々の貢税支払額の総計であると考えられるし、もしくは艦船供出国が同盟に供出した艦船を現金に換算した金額をも含めて合計四六〇タラントンであったとも考えられ得る。

史上著名な古代アテナイの諸方面にわたる発展の基礎にこの同盟にあったことは広く知られている所であるが、この発展を支える財政的基礎はこのような不明の状態にある。四五六―五年アテナイはエジプトに於て、ペルシャによって手傷い敗戦を喫し、同盟の本部及び金庫をアテナイに移したのであるが、この年以後同盟加入国の同盟に支払った貢税は、アテナイに於て碑文として刻まれた。年々の各国の支払った貢税のリストは、メリット (B.D. Meitt) ウェイトジョリ (H. T. Wade-gery) マクレゴール (M. F. McGregor) の三者の共同研究によって復原され「アテナイ貢税表」 (Athenian Tribute Lists, Vol I, 1939, Vol II, 1949, Vol III, 1950, Princeton 以下 A. T. L

と略称)として発表され、四五五―四年以後の同盟の財政を伝える最も貴重な史料としての地位を獲ている。しながらこの A・T・L も同盟発足時についてはもとより何も伝えてはいない。従って我々に四五五―四年以後の同盟の姿から、種々の歴史的條件を考慮しつつ、同盟の成立時の財政面を推測し、ツキシデスの伝える数字を検討し、ヨーロッパ史上重要な役割を果す同盟の成立時の情勢を再構成して行かねばならない。

一

ツキシデスは一・九六に於て同盟の成立を伝えた後、発足した同盟の活躍を年代を追ってのべているのであるが、その六・八五に於て注目すべき事実をのべている。この場面はアテナイ人エウペモスのカマリナ人に対する演説を伝えるものでアテナイ及び同盟の特色をのべ、その中でエウペモスは次の如く云わしめている。

「我々がギリシヤにおける諸都市を治めるのは各々の都市が我々に有用であるということを知るべきである。キオス人やメテウムナ人は艦船の供出を以て独立している。しかし他の盟邦の大部分を現金の供出を条件としてよりきびしく支配し……」

ここでは明らかに現金の貢税を同盟に納めている国と艦船を供出している国とが区別され貢税はあくまで現金を納入する場合にのみ限られている。このツキシデス六卷八五章における貢税支払に対する表現は *konutaw* …… *dogd* が用いられ、また艦船供出に対しては *seon tlapokow* とのべられているが、この表現はさきに一卷九六において同盟発足の事情をのべ、盟邦の義務として貢税支払と艦船供出を規定した文章と同一の用語を用いており、従って貢税はあくまで現金の支払のみを意味するので、艦船を現金換算した金額を含めないと推測するに足る一証拠を示す。

つづいてツキシデスは七卷七五章において次の事実をのべている。四一三年アテナイ及び同盟はシケリアにおい

てアテナイの運命を決する戦いにのぞんでいた。この時アテナイに味方した盟邦に關してツキシデスは貢税を支払って同盟に加入している国及び「艦船の供出を条件として独立」しているキオス人のあったことを明らかにし、疑もなく現金のみで貢税を支払っている国々と艦船を供出している国を區別している。このツキシデスの記述は次の事実と関連せしむる時、重要である。即ち四一三年アテナイは盟邦に対し、各国が行う貿易に五パーセントの税を課し、貢税に代え、同盟の収入の増加をはかっていた。それにもかかわらずキオス人は同盟に対して艦船の供出を続けていたことがこのツキシデスの記述によって明らかにされる。それ故艦船の供出は貢税の一部ではなく、それとは別個のものであったと推測され得るのである。^②

二

以上にのべた貢税と艦船供出とを別個のものとする立場に拠るならば同盟成立に際しツキシデスが伝えている四六〇タラントンの貢税とは、現金支払のみの総額を意味するのであって、供出した艦船の現金化された価格を含めたものではないこととなる。この立場にもとづいて、同盟の發展をあとずけて見る時、ツキシデの記述に対する重要な矛盾を我々は見出す。

四七八―七年同盟の成立以来、同盟艦隊はアテナイの名将キモンの指揮下各所に転戦しペルシャの活動を封じ去った。エウリュメドンにおける勝利はエーゲ海をアテナイ及び同盟の制海権下に置いた。^③その頃同盟成立以来十年余相繼ぐ遠征に疲れた艦船供出国は、艦船に代えて現金による貢税支払を以て同盟に対する義務を果たそうとし、若干の国々は同盟に対する義務を貢税支払に切りかえた。^④従って現金による貢税額に増加したと推斷し得る。

史実に従えばエウリュメドンの勝利の後、アテナイは一方においてはギリシャ本土にその支配力を拡大し、他方海上においてはペルシャとの戦いを続行、エジプトにおいてペルシャ軍と戦い所謂二正面作戦時代に入る。しかし

ながらアテナイ及び同盟軍はエジプトにおいて大敗を蒙り、^⑤直ちに同盟本部及び金庫はアテナイに移された。^⑥これ以後盟邦の納める貢税はアテナイに集められ、貢税表に碑文として残された。ネセルハウフ (Herbert Nesselhauf) はこの金庫移転後の貢税額を計算した。^⑦即ち金庫移転後第一回の徴集は四五四—三年であるが、同盟加入各国の貢税額は四年毎に更められる習わしであった。彼は A・T・L による貢税表の復原の完成以前に次の如き仮定にもとづき貢税納入国の数及び貢税額を計算した。一、四年間の課税期に一度貢税表に名をとどめた国はその期間中に毎年同額の貢税を支払った。二、最初の三ないしは四期間中定期的に支払った国は、反対証拠のない限り他の二、三期間も同様に支払っている。

この仮説にもとづきネセルハウフの計算したところによれば第一課税期 (四五四—三年—四五一—五〇年) は一七〇国で総計四九〇タラントンを支払い (仮説一にもとづいて)、第二期は四四九タラントんと算定している。^⑧この額は同盟成立時の貢税を四六〇タラントンとするツキジデスの数字に近似し、かつその数字が現金支払のみを意味することを証明するかに思われる。

しかしながら復原された A・T・L はかなりの解説不能の個所をのこしながらも、貢税支払国の数を明らかにしている。ゴムの計算によれば四五四—三年の貢税支払国として一四一国以上の余地は碑文上に残されていない。^⑨この史料の示すところは明らかにネセルハウフの仮説の誤りを実証するものであり、この史料に示された貢税支払国の数を以てしては、とうてい四六〇タラントンに近い貢税額をあげることは不可能である。

四五四—三年以後の貢税支払国の数は同盟成立時より決して減少してはいない。すでにのべたツキジデス一、九は艦船供出国が貢税支払国に転化したことをのべている。また一国あての貢税額が減額され、従って四七八—七年には四六〇タラントンの総計であったものが四五四—三年にはこの数字を下まわるに至ったと云う推測もまた不合理である。何故なら四五六—五年における同盟軍のエジプトにおける敗戦によって、アテナイは急ぎペルシャに

対する軍備の建て直しの必要にせまられており、四五四—三年には艦隊再建のための多額の貢税の必要性こそあれ、貢税額を従来のもより減額する何等の理由を見出し得ない。事実、敗戦後日ならずしてアテナイは二〇〇艘の大艦隊を再建し、キモンを将としてキュプロスに遠征せしめ、ペルシャに挑戦せしめている。^⑩

三

ネセルハウフは明らかに貢税国の数を事実より多く計算し、それによって四六〇タラントンと云うツキシデスにより示された数字につじつまを合せていた。しかしネセルハウフの計算は史料の示す事実と合致していない。このように見る時、A・T・Lによって示される四五四—三年以後の同盟加入国の納めた貢税の総計が当面の問題に解決を与える重要な鍵とならざるを得ない。

すでにトッド (M. N. Tod) によれば四五四—三年 (エジプト敗戦後の艦隊再建の第二年) の貢税国は合計一三七国で貢税総計は三六九タラントン一六九〇ドラクマイ。四四三—二年は一六五国により三四九タラントン一四四〇ドラクマイ、四三三—二年には一六六国により三八八タラントン三九〇ドラクマイの貢税が支払われたものと算定されており、^⑪ 同盟がその成立当時より発展を見た後年においても、その貢税徴集額は約一〇〇タラントン前後ツキシデスの数字より不足していることを示し、さらにゴムの示す数字は僅にトッドのそれを上まわるとはいえ、その差は僅少である。^⑫ つづいて四五四—三年以後の貢税表碑文の復原に力をつくした A・T・L の著者達の最も權威ある算定によれば四五四—三年は一四〇国、つづいて一六二、一四五、一五七国が貢税を納めたと断定されており、^⑬ 四五四—三年の貢税総計は三八八タラントン一四八〇ドラクマイとされている。^⑭

以上の碑文の示す数字は明らかに貢税額が同盟成立当時のツキシデスの伝える数字よりも一〇〇タラントン前後の低額を示している。ここに問題は再度解決し難い難関につき当る。この如く貢税を現金支払のみと考えるなら

ば、後年の拡大された規模における同盟においてさえその貢税総計は同盟成立当初のそれに及ばない事実を我々は承認せざるを得ない。この事実を承認するならば、ツキシデスの伝える数字は艦船提供の義務を負うた国の供出した艦船を現金化して、これを現金によって支払われた金額に加えて四六〇タラントンに近い数字を算定するか、もしくはツキシデスの数字そのものが誤りであるとする以外に解決は見出され難い。

四

このような二者選択に直面し A・T・L の著者達及びゴムはツキシデスの数字を信頼し、従って、四六〇タラントンとは現金及び艦船供出を現金に換算した額の合計を解決する。^⑩ この解釈の基礎をなすものはツキシデスがこの数字をあげた一巻九六章の分析である。従って我々は再度ツキシデスの伝える同盟成立の事情に立ち帰らねばならぬ。問題はツキシデス一巻九六章一節にある。 *ὁ Ἀθηναῖος …… ἐταῖαν ἄς τε εἰδὲν παρὲς τὸν πόλεον ἐρίματα πρὸς τοῦ βασιλεὺς καὶ ἄς νοῖν*. この文中 *ἐταῖαν* の解釈はこの問題を解く重要なポイントである。即ち *ἐταῖαν* を *assess* に解釈するか、 *detail* もしくは *appoint* に解するかは相違である。 *assess* と解する場合「アテナイ人は現金を供出する国と艦船を供出すべき国との双方に（その現金及び艦船の量を）賦課した。」の意味にとられる。しかしながら A・T・L の著者及びゴムによれば次の如くなる。「アテナイ人はバルバロイに対抗するためどの都市が現金を供出し、どの都市が艦船を供出するかを命じた（もしくは「区分した」）^⑪。この後者の解釈をとるならば同盟加入国が同盟に対して負う義務はすぐにきまっており、その額は四六〇タラントンとされておいた事実が補足されねばならない。^⑫ そしてツキシデスの文はこの金額の支払方法としてある国には現金による、また他の国には艦船による方法をとることを命じた。もしくは区分したことを意味する。それ故四六〇タラントンのうちには現金も艦船も含まれており、貢税は両者含めて四六〇タラントンであったと見なされる。

四七八―七年の同盟加入国の貢税額は史料として残されていないが、後年の貢税表より推測してA・T・Lの著者はこの現金により二九六タラントン 五四〇〇ドラクマイを、また艦船供出国の艦船を現金化した場合の金額の合計を一九六タラントン二二〇〇ドラクマイとし総計四九三タラントン一六〇〇ドラクマイの数字を一応計上し、かつ同盟設立当初の同盟加入国の範囲は四五四―三年よりも狭く、加入国の数も少いと云う推測からこの数字は減じられねばならぬであろうことは非合理的な推測でないとしている。^⑧ その結果ツキシデスの総字に近いものがこの年現金と艦船によって同盟に納められたと考えられるのである。

五

以上見るならば同盟はその艦隊を建設維持するため年々総計四六〇タラントンに近い現金及び艦船の提供をうけたと云うツキシデスの数字はさきにのべたツキシデス六巻五八章及び七巻五七章の記述との矛盾を除けば肯定され得る。しかしこの肯定はあくまで決定的史料を缺く可能な推測を出ない。従って可能な推測は別の面からなされ得る。この場合をツキシデス一巻九六章がその出発点である。ツキシデスの叙述は通例年代を追って進行するよう構成されているのでこの問題の部分にのべられたことがらを年代的秩序にもとづいて挙げて行くと次の如くなる。

1. アテナイ人は同盟の指揮権を得たうえ、どの都市が現金を供出し、またどの都市が艦船を供出すべきかを命じた(区分した)。

2. 貢税を集める任務をもつ官吏としてヘレノタミアイ(ギリシャの会計官)が設けられた。

3. 貢税は四六〇タラントンであった。

4. 金庫はデロス島に置かれ、会議もまたこの島の神殿で行われた。この配列が時間を追うものであるとするならば同盟国の義務を艦船供出と組合供出の二種に区分し、そのうち現金のみが貢税(φόρος)と云われ、その合計は

四六〇タラントンであつたと解することは極めて自然である。^①

この解釈に対する文法上の批判は上述の3におけるツキシデスの表現に対して加えられる。然るに *ὅτι ἀπὸ τοῦ τὰς ἀποδείξεων τὰς ἀποδείξεων* は *Pluperfect passive* の遠まわしの表現ともとられ得る。従つてこのところは完了形としてすでに四六〇タラントンの数字が「区分」の以前に決定してゐたと云う意味をも持ち得る。この解釈によれば四六〇タラントンの金額が艦船をも含めた数字であるとみなされることも可能である。^②

しかしながらツキシデス全巻を通覧した場合この文章は過去形に解すべきであると思われる。いま他の史料を離れてツキシデスにより伝えられる前五世紀のアテナイ及び同盟の財政史の歴史像は、この一卷九六章にのべられた現金のみで四六〇タラントンとする立場と些かも矛盾するところが見られない。すでに屢々引用した六卷八五章及び七卷五七章は明らかに艦船供出と現金供出を区別し、現金の供出のみを貢税とすることを明らかに示している。

更にペロポネソス戦争の直前ツキシデスはペリクレスをしてアテナイは四三一年にあらゆる他の収入は別として貢税によって六〇〇タラントンの収入を得つたつと述べている。^③ ツキシデスによれば貢税は現金のみを意味し、四七八―七年の同盟成立時においては四六〇タラントンが現金支払国に課せられ、かつ同盟がその範圍を広め、加入国をも増加せしめた四三一年においては当然貢税の総額も増加し六〇〇タラントンに達したという一貫した秩序が示される。従つてツキシデスののべる歴史的世界にあっては同盟成立時において四六〇タラントンが現金で課せられたということは何等の矛盾を示さない。

六 結 語

上述して來た第一回アテナイ海上同盟の成立時における貢税の内容及びその額の決定に関する問題に関しては、

決定的な史料を欠いているため諸説はことごとく推測を交えている。従ってこの結語も当然仮説的ならざるを得ない。ゴム及び A・T・L の著者達によって主張される立場はあくまで四五四—三年以後に始まるアテナイ貢税表により、四五四年以後の同盟の姿より、四五八年—七年の同盟像を構成したものである。同盟が拡大された四五四年以後においてさえ現金の徴集は四〇〇タラントに満たなかった厳然とした史実を碑文は示している。従って四六〇タラントと云う四七八—七年の金額は当然艦船を含めたものと見なされ、かつ *sober* の内容を現金および艦船を併せたものと解した。

チエンバースの最近の立論はツキシデスの記述は年代的秩序により構成されていることにより、かつ六巻八五章七巻五七章の記述を重視し現金と艦船は分離して考えるべきことを強調している。この立場によれば現金のみで四六〇タラントンの過大な徴集が四七八—七年になされたことを一応認めねばならない。ツキシデス自身のうちにあるのはこの額は矛盾を示していない。しかし碑文史料よりの推測は明らかにこの金額を過大なものとして否定するのである。

それ故四六〇の数字を認めるならばそれは現金と艦船の両者を含めたものとさるべきで、また現金と艦船の区分がまず行われ現金を示す数字を四六〇と解釈するならば後年の A・T・L を中心とする碑文の明らかにする数字と矛盾するため、ツキシデスの伝える四六〇の数字自体に誤りがあると考えざるを得ない。事実 A・T・L の著者によるめんみつな推理と計算は四七八—七年に現金の徴集を二六〇タラントンに近いものとしている。

以上により云い得ることは次の如くである。

1. A・T・L、ゴム、トッドによって四五四—三年以後の同盟に支払われた現金はいずれも四六〇タラントンをはるかに下まわっている。

2. 四六〇タラントンの数字が現金と艦船の区分以前にきまっていたとするならば、この数字はこれ等両者を含

めたものである。しかしアリスチデスがペルシャの調査をそのままうけついでと云うことは推測に止まり、何等の確証は存しない。²⁵⁾

3・現金と艦船は分離したものと考える立場はツキシデスの以後の文中においてもとられた立場であり一貫している。かつ現金のみの四六〇タラントンの収入はツキシデスの全記述内では矛盾を示さない。(但し碑文の証拠とは著るしく食い違ふ)

その結果、A・T・Lにもとづく碑文の数字の正しさを認め、アリスチデスがペルシャの調査をそのままうけついで事実を示す証拠もしくは妥当な推測が示されない限り、現金と艦船は分離したものと考えられ得る。更にツキシデスが一貫して現金艦船の分離の立場をとったことを認め、ツキシデスの誤りは四六〇の数字にあったと推定され得、恐らくはA・T・Lが現金のみの総計として算出した二六〇タラントンに近い数字がそれに代るべきであった。²⁶⁾

註

1' Thuc. I. 96.

2' Chambers, M., Four Hundred Sixty Talents, Classical Philology, V.LII, 1958.

3' Thuc. I.100

4' Thuc. I. 99.

5' Thuc. I. 110.

6'

7' Nesselhauf, H., Untersuchungen zur Geschichte der Delisch-Attischen Symmachie, Klio Beiheft xxx, 1933,

Leipzig, pp95—120.

8、第一課税期がツキシデスのあげる四六〇タラントンを上まわっているのは四五七年のアイギナの同盟加入を考慮に入れた

ためであり。第二期における減少は同盟加入國中のエーゲ海の島にあるものの税額が減額されたからである。

- 6' A. T. L. Vol. III List I. Gomme, A. W., A Historical Commentary on Thucydides vol. I. 1950, Oxford. p. 275.
10' Thuc. I. 112
11' Tod, M. N., "A Selection of Greek Historical Inscriptions to the end of the Fifth Century B. C. 1951, Oxford, p. 56.
12' Gomme, A. W., A Historical Commentary on Thucydides, Vol. I. 1950, Oxford, p. 274.
13' A. T. L. Vol. II, List I. 2, 3, 4.
14' A. T. L. Vol. II, List I.
15' Gomme, op. cit. p. 284 A. T. L. Vol. III, p. 236
16' *référé* は assess を意味する時は accusative の(物)と dative, (人)この場合はポリス)を持たねばならぬ、がこの文中でそれらは見あたらない。 detail, あるいは appoint を意味するのには accusative の人と、その後 infinitive をともなう。この文章はこの後者の場合に適合する。 cf. A. T. L. Vol. III. p. 236
17' プタルコスによれば同盟は正当な課税を決定するために加入国の国土と収入を調査することを必要としこの調査をアテナイ人アリスチデスにまかせた。(Plutarchos, Aristides, 24, 1.) ちやいへんロドトスによればこのような調査はすでになされてきた。すなわちペルシャ人アルタペルネスは、すでにペルシャ戦争以前に、イオニアのギリシャ諸国より貢税をとりたてる目的を以て諸国の財源を調査している。(Herodotos VI, 42.) A. T. L. によればアリスチデスが同盟のために行った調査はアルタペルネスの調査を継承したものであり、かつ、イオニア以外のペルシャ支配下にあつてペルシャ戦争によつて解放されたギリシャ諸国(クレスポント、アイオリス、カリア方面)に於ても当然ペルシャ側によりすでに調査はなされていたと推測され、これらの地方に於てもアリスチデスはそれを継承したと見なしている。 A. T. L. Vol. III. p. 234.
18' A. T. L. Vol. III. pp. 241, 242.
19' Chambers, M., Four Hundred Sixty Talents,

Classical Philology, LIII, 1958. 彼は区分が先に行われたことを重視している。

20' Chambers, op.cit. p.27, n. 7.

21' Thuc. I, 13, 3.

22' チェンバースにより引用されている K. M. T. Atkinson, The London Times Literary Supplement (June 30, 1945) はこの問題に対し興味ある暗示を行っている。これによればヘロドトス、六・四二・二によりイオニア及びその周辺のギリシャ諸国がペルシャに貢税を支払っていたことは明らかであるがこの額を四〇〇タラントンとし、かつ、ヘロドトス、三・八九・二によりこの四〇〇タラントンはバビロニアタラントンであり、この貨幣とギリシャの Euboic Talent. との交換率は七対六であり、従って四〇〇 B・T は四六七 E・T となるとしている。しかしながらこの換算率は確定され難いし、また四七七年の同盟加入国は単にイオニア地区のみでなく島々や北部ギリシャの諸国もこれに加わっている。

23、ツキシデスがアテナイを離れて追放の身であったことは数字上の誤りをもったかも知れぬことを暗示する。しかし *dogos* そのものの概念には誤りをおかすことはなかったであろう。

The Meaning of Phoros in Thucydides

I. 96. 2.

Résumé

Suzuki Tsuneya

In this paper I propose to consider the first assessment of the Delian League. According to Thucydides, the first assessment of the League was 460 Talents, and the Athenians arranged that some states should contribute ships and some cash. (Thuc. 1. 96.) My question is following.—

1. Does this figure, 460 T, refer only to cash due to be paid? or
2. Does it include both cash and monetary equivalent of the ships?

The conclusion is that when Thucydides spoke of *φορός*, as at 1, 96. 2, he meant the cash contributed to the Delian League by the states that paid cash, not ships, and I assume that Thucydides was wrong when he wrote that the first *φορός* of the League was 460 T.